

## 《研究ノート》

## 「四王国分立時代」再考

阿部拓児

## はじめに

前1千年紀初頭から後半にかけての西アジアには、アッシリア（新アッシリア）とペルシア（アカイメネス朝ペルシア）という、2つの巨大な帝国が存在した。この両国は、揺籃の地や誕生の背景、統治者集団の出自が異なるものの、ともに広域的な支配に成功したという共通点を見いだせる。とくに後から出てきたアカイメネス朝ペルシアは、広大な帝国を統治するための技法を、多く先駆者たるアッシリア帝国に負ったと、つとに指摘される（Panaino 2000; Johandi 2012）<sup>1)</sup>。しかしながら、この両帝国のあいだには半世紀以上もの時間的な開きがある。さらには、片やメソポタミアを中心に、もう一方はイラン高原から興ったという地理的な隔たりも存在し、この2国を短絡的に結びつけることは難しい。けだし、アッシリア滅亡後からアカイメネス朝ペルシア帝国誕生までの経過を明らかにすることは、種々の難問——アカイメネス朝ペルシアは最初期にその国家的な基盤をどこに置いていたのか、多極化したポスト・アッシリア時代を制したのが、なぜキュロスであったのか、メソポタミアの帝国からイラン高原の帝国への接続はどのような経路をたどったのか——に答える糸口を与えてくれよう。

ところで、このポスト・アッシリア時代は、わが国では「四王国分立時代」、もしくはそれに類する名で呼びならわされてきた。『岩波講座 世界歴史（第1版）』の第1巻「古代オリエント世界・地中海世界1」では、「四国対立時代」と題された一章がもうけられ、そのなかで執筆者の杉勇氏はこの時代の特徴をつぎのように解説する。

アッシリア帝国の滅亡（前612年）をもってオリエント世界は、1つの新しい統一世界帝国——ペルシア帝国——が再び生れるまでの過渡的時期をむかえることになった。この時期はしばしば「四国分立時代」ともいわれ、前539年10月ペルシア王キュロス（2世）大王がバビロンを陥れるまで約70年間の時期にあたる。もし全オリエント的にペルシア帝国が拡大されたときをもって一時期を劃するものとするならば、カンビュセスがエジプトの第26王朝を滅ぼして「インドからエティオピアまでを支配」（『旧約聖書』「エステル記」1ノ1）するようになった前525年まで約90年間のことである。

一名「四国分立時代」というのは、アッシリアの遺領を分割した新バビロニア王国とメディア王国、それに老衰王国のエジプトと、西端の新興リュディア王国が、互いに独立しながらもついに制覇することができなかつた時代である。新バビロニア王国とエジプトは、オリエント伝統の地であつて、いずれも過去の栄光の復興にその意義をもつていたのに対して、メディアとリュディアはともに新興勢力であり、民族的にも前二者とは全く異なつたインド・ヨーロッパ民族であり、次の統一世界帝国の主となるペルシア人の先駆者であつたことは、この過渡的時代の意義を大きなものにするといふことができよう。(杉 1969, 273)

ここで杉氏は、「四王国分立時代」の上限を前 612 年、下限を前 539 年もしくは前 525 年に置く。前 612 年は、新バビロニアとメディアの連合軍がアッシリアの首都ニネヴェを陥落させた年である。この時代の上限は、これ以外にも、メソポタミア南部がナボポラサルのもとアッシリア帝国から分離独立し、新バビロニア王国が誕生した前 626 年、もしくは最後の王アッシュル・ウバリト 2 世のもとアッシリアが滅亡した前 609 年に置くことができよう。また下限についても、「四王国」のひとつであるメディアがキュロス 2 世によって倒された前 550 年（通常、アカイメネス朝ペルシア帝国の建国はこの年に置かれる）を採用することもできる。したがつて、「四王国分立時代」は最大限に見積れば、前 626 年から前 525 年までの約一世紀間、最小値を取れば前 609 年から前 550 年までの 60 年間がそれにあたる。

『岩波講座 世界歴史（第 1 版）』の刊行は、今からおよそ半世紀前になる。この半世紀間で当然のことながら、歴史学界におけるそれまでの常識の数々が塗り替えられてきた。「四王国分立時代」についても例外ではなく、この時代についてはとりわけ今世紀に入つてから、それまでの常識が大きく揺らぎつつある<sup>2)</sup>。それにもかかわらず、わが国の歴史教育、なかんずく高等学校「世界史 B」の教科書では、従来どおりの時代像が教えられており、「四王国分立時代」も受験生の暗記必須の用語となつてゐる<sup>3)</sup>。

本稿は第一に、この「四王国分立時代」を取り巻く研究状況を整理し、上に掲げた複数の難問の出発点を見据える。そのうえで、その作業のなかから新たな研究テーマを見いだすことも目標とする。以下では「四王国分立時代」は存在しなかつた（かもしれない）との議論を展開するため、この時代そのものは、よりニュートラルにポスト・アッシリア時代と呼ぶ。一方で、当該の時代とそこに付された特別な価値をあわせて指す場合には、「四王国分立」の呼称を用いるといった、使い分けをする。なお、英語およびその他の欧米諸語では「四王国分立時代」に対応する用語は見られない。すでに杉氏の論考には、「この時期はしばしば「四国分立時代」ともいわれ」との記述が見られることから、この用語が杉氏以前にさかのぼることは間違いなからう。筆者は初出事例を突き止める努力を怠つたが、「四王国分立時代」という用語がわが国で独自に（ガラパゴス的に）発展し、そのロマンチックな響きが時代のイメージを固着させてきた可能性は否定できなからう。

## 1 メディア

### (1) ヘロドトス「メディア誌」

長らく「四王国分立時代」の一角を担ってきたのは、イラン高原北西部を中心に広がるメディア王国であった。伝統的なメディア王国理解の基盤には、ヘロドトス『歴史』におけるメディア史の記述がある。前5世紀初頭、アカイメネス朝ペルシア帝国領西辺のギリシア系植民都市ハリカルナッソス（現在のトルコ共和国ボドルム市）に生まれたヘロドトスは、キュロス2世による建国からクセルクセスによる対ギリシア遠征までのアカイメネス朝ペルシア史を時間軸の中心に据えた、歴史書全9巻を著した。そのうち第1巻95-106章は、メディア王国の興亡がペルシア史の前史として描かれており、この箇所は独立して「メディア誌（メデイコス・ロゴス）」とも呼ばれている。

「メディア誌」の冒頭はつぎのように始まる。

アッシリアは520年にわたって上アジアを支配したが、アッシリアから離反の口火を切ったのはメディア人であった。ともかくメディア人は自由のためにアッシリア人と勇敢に戦い、遂にアッシリアの桎梏をはねのけて、自由を獲得したのであった。そして他の民族もメディア人の範にならったのである。（Hdt. 1. 95. 松平千秋訳。以下同じ）

ヘロドトスによれば、メディアは長らくアッシリア帝国の支配下に置かれていたが、このときにアッシリアからの分離独立に成功する。ヘロドトスの提示する時系列に従えば、この事件は前700年、すなわちアッシリア帝国ではセンナケリブの治下（在位前704-681年）に起こったことになる<sup>4)</sup>。独立当初のメディアは無法地帯で、犯罪が絶えなかったために、メディアの民衆はデイオケスという公明正大に見えた人物を選び、王に立てた。民の推薦を受けたデイオケスは王位に就いて以降、メディアの国制をさまざまに整えていく。すなわち、王の身辺警護のための親衛隊を創設し、王との直接面会や御前での不敬行為を禁止し、文書による訴訟制度を確立した。彼の業績の最たるものが、王都エクバタナの建設である。その様子を、ヘロドトスはつぎのように伝える。

デイオケスは壮大強固な城廓を築いたが、これが今日アグバタナ（エクバタナ）の名で呼ばれる城で、同心円を描いて城壁が幾重にも重なり合っている。この城廓は、ひとつひとつの壁の輪が、胸壁の高さだけ高くなってゆくように設計されている。城がこのような形状を呈しているのには、地形が丘陵を成していることも、いくらか手伝ってはいるが、むしろそのように設計されたのである。環状の城壁は全部で7重になっており、一番奥の城壁の中に、王宮と宝蔵がある。城壁の内最大のもは、アテナイの町の円周とほぼ同じ長さである。…中略…このようにデイオケスは、身の安全のため自分の

宮殿のまわりに城壁をめぐるしたのであったが、人民たちは城壁の外廻りに住むように命じた。(Hdt. 1. 98-99)

デイオケス以降、メディアの王位はプラオルテス、キュアクサレス、アステュアゲスと、親から子へ4代、計150年間引き継がれた。キュアクサレスの時代には、アッシリア帝国の首都ニネヴェを攻略し、かつての宗主国を滅亡へと追い込む(Hdt. 1.106)。メディア王国が最大版図に達したのもキュアクサレスの治下で、「四王国」のひとつである西のリュディア王国と戦い、「ハリユス河より上(東方)のアジア全土を統一し掌握した」(Hdt. 1. 103)という。ハリユス川は現在のトルコ共和国を流れるクズルウルマク(Kızılırmak、トルコ語で「赤い川」の意)にあたり、この川はアナトリア東部から西にむかって発したのち、大きくカーブしながら北上し、黒海へと注ぎこむ。このヘロドトスの記述が根拠となって、図1に見られるような、ハリユス川を境にメディア領とリュディア領が直接隣り合うような「四王国分立時代」の勢力地図が描かれてきた。

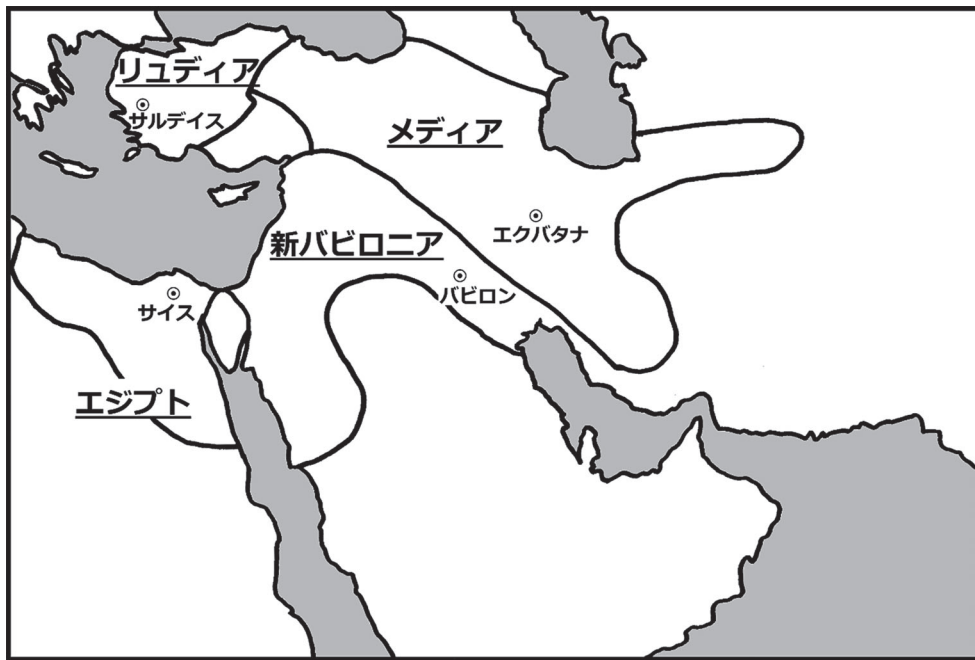


図1 「四王国分立時代」の概念図 筆者作成

## (2) ヘロドトス「メディア誌」への疑念

1980年代に入ると、上記のようなヘロドトスの「メディア誌」によったメディアの国家像を疑問視する、重要な論文が相ついで発表された。まず、1981年発表の論文で、ヘルム(Helm 1981)はヘロドトス「メディア誌」とアッシリアの文字史料とのあいだに整合性をも

たせることには限界があると主張した。そのうえで、「メディア誌」はペルシアの英雄伝承にすぎず、それゆえメディア史の復元に使用することはできないとの見解を示した。その後ヘルム論文については賛成、反対の両論が巻き起こった。

まずは反対派の意見を紹介しよう。ヘルムの所説にたいしブラウン (Brown 1988) は、アッシリアの文字史料はアッシリアの支配下に置かれたメディア人についての記録であり、一方「メディア誌」はアッシリア帝国外のメディアにかんする伝承である (メディアにたいするアッシリア支配の実態については、次節で取り上げる)。したがってアッシリア由来の史料と「メディア誌」のあいだに無理に整合性を求める必要はなく、「メディア誌」は依然としてメディア史復元にとっての重要な情報源たりうると反論した<sup>5)</sup>。

しかし、その後のメディア史研究にとって大きな影響をもたらしたのは、ブラウンによる上記の批判よりもむしろ、ヘルム論文を継承発展させた、サンシシ=ヴェールデンプルフの論考 (Sancisi-Weerdenburg 1988; cf. Sancisi-Weerdenburg 1994) であった<sup>6)</sup>。「そもそもメディア帝国は存在したのか？」という挑発的なタイトルが付けられた本論考で著者は、一人の国王を頂点に据え、立派な王宮をそなえた首都をもつ、制度的な国家としてのメディアの姿を「メディア誌」の外に見いだすことはできないと主張した。これにはメディアの首都とされるエクバタナの遺構が、近代に築かれた都市 (現イラン北部のハマダーン) の下に埋まっており、発掘調査がほとんどなされないという事情があずかっている。考古資料の欠如にくわえて、非ギリシア語の文字史料からもメディアの制度的な国家像は見あたらない。「メディア誌」によればメディアは文書社会であったはずだが、メディア人自身による文字記録は残っていない。一方で前8世紀から前7世紀なかばにかけて、アッシリアの史料にはメディアへの言及がしばしば見られるが、それによれば単独統治者としてのメディア王なる人物は存在せず、メディア人らは集団ごとに要塞化された場所に居住し、そこには集団をたばねる首長がいたという。前7世紀なかば以降になると、本来この時代はメディア王国の最盛期にあたるはずなのだが、アッシリアの史料ではむしろメディアへの言及が途絶える。したがって、サンシシ=ヴェールデンプルフによれば、メディアの実態は部族連合に近く、「帝国」としてのそれはギリシア人らの想像の産物にすぎなかったという。

なお、サンシシ=ヴェールデンプルフ以降、メディアは「帝国」であったか否かという問いがしばしば立てられることがある。しかし、そこではそもそも「帝国」とは何を指すのかという定義論がなされることはなく、先に掲げたサンシシ=ヴェールデンプルフの議論も、メディアは「帝国」であったか否かよりも、「王国」と呼ぶにふさわしいか否かと言い換えたほうが、日本語の語感としてはしっくりくるように思われる。したがって、以下ではこの議論を「メディア「王国」問題」と呼ぶこととする。

### (3) メディア「王国」の「没落」

今世紀に入ってからメディア史研究における最大の成果は、2001年にイタリア北部の

都市パドヴァで開催された国際学会、および2003年に刊行された本学会の報告論文集である(Lanfranchi – Roaf – Rollinger 2003)。この学会では、多くの論者がヘルム／サンシシ＝ヴェールデンプルフの研究を出発点に据えており、従来のような「王国」としてのメディアを所与の前提とした議論を避けている。以下では、本論文集(以下、論集タイトルの *Continuity of Empires* (?) を縮めて「CE 論集」と表記)所収の論考および、論集後に発表された比較的新しい研究成果をもとに、メディア史研究の現在地を見定めたい(なお、CE 論集についてはウォーターズによる詳細な書評論文(Waters 2005)が発表されているので、あわせて参照されたい)。

まずは、アッシリア帝国によるメディア支配の実態だが、これについてはラドナーによる諸論考(Radner 2003; Radner 2013)がある。アッシリアの記録にメディアへの最初の言及が登場するのは、シャルマネセル3世(在位前858-824年)の作成した「ブラック・オベリスク(角柱状石碑文)」においてで、アッシリア軍によるメディア侵攻が語られている。ラドナーによれば、アッシリア帝国による対メディア侵攻は当初、メディア産の良馬を求める一時的な略奪であったものが、前8世紀中頃から拠点確保による領域支配へと移行していったという。それでは、アッシリア支配の影響がメディアのどの地域にまでおよんでいたかという、「ビクニ山(Bikni)」が最奥の地であったと考えられる。したがって、この「ビクニ山」を現在のどの山に比定するかによって、メディアにおけるアッシリアの領域図が変わってくる。ラドナーは「ビクニ山」をカスピ海南岸のダマーヴァンド山(Damavand)に比定する説を採っており、この説に従えば、メディア国の「首都」であったエクバタナはアッシリアの支配下に置かれていたことになる。一方で、同山をザグロス山脈の支脈にあるアルヴァンド山(Alvand)に比定する説もあり、この場合アッシリア支配はエクバタナまで到達しなかったことになる(これが、先に紹介したブラウン説の根拠となる)。ただし、アッシリアの史料には「遠いメディア人」という表現も登場し、ラドナーによればこれはアッシリア外のメディア人を指しており、アッシリアの支配はメディア全域にはおよばなかったという。

アッシリアによるメディア支配は、ランフランキの論考(Lanfranchi 2003)によれば、既存の政治体制を保存した、ゆるやかな統治だった。アッシリアにとって、メディアが敵国ウラルトゥの勢力圏に取り込まれるのを防ぐことが支配の主目的であって、当地に積極的な干渉・介入をする意図は持っていなかったからだという。したがって、メディア全体にアッシリア支配にたいする激しい反発は見られず、前610年代後半のメディアによるアッシリア帝国への侵攻は、中央集権化したメディア「王国」軍の進攻ではなく、すでにアッシリアに吸収されていたメディア人部隊の暴動としての性格があったと推測する。

ポスト・アッシリア時代のメディアについて論じるロリンガーは、メディア「王国」否定論者の代表格である。ロリンガー(Rollinger 2003; cf. Rollinger 2020)によれば、国家的な制度の整っていなかったメディアにとって、ヘロドトス「メディア誌」に見られるような広域



図2 イラン高原 'Iran relief location map' by Uwe Dederig - Own work (CC BY-SA 3.0, Wikimedia Commons) に筆者加筆

支配をおこなうことは不可能であった。北シリアと東アナトリアにおけるメディア支配を示す根拠は薄弱で、メディアがハリュス川によってリュディアと国境を画したとの記述は、ヘロドトスの知識不足と文学表現（「川を越える」＝「人としての矩を踰える」）に起因する誤解だと提言する。

以上のように、今世紀に入って早々にメディアは「四王国」の地位から引きずり降ろされ、イラン高原北部の部族連合へと格下げされてしまった。CE 論集の編者による結語には、この急変のあり様がつぎのような言葉で集約されている。

しかしながら近年、「メディア帝国」はペルシア、エラム（エラムの地位については長らく論争があるが）、アッシリア、北シリア、アルメニア、カッパドキアをふくむ、それまで想定されてきた「州」や「属国」の大半を喪失した。ドランギアナ、パルティア、アレイアをふくむメディア東部の諸州もまた、史料はそれらの地位について語ってくれないものの、メディアから「解放」されたかもしれない。そしてこれからの数年

で、メディアがさらにどれだけの領土を喪失するかを見きわめることは難しい。  
(Lanfranchi – Roaf – Rollinger 2003, 398) <sup>7)</sup>

## 2 エラム

### (1) エラムの「再発見」

ポスト・アッシリア時代研究において、近年とりわけ注目を集めているのがエラムである。エラムはザグロス山脈西裾からフーズスターン一帯の地域、およびそこに栄えた古代国家を指す。国家としてのエラムは前3千年紀末に起源をもち、アッシリアと同様に、古／中／新の三時代に区分して呼ばれる。このうち本稿の対象となるのは、新エラム時代（前1000年頃から前550年）である。

メディアがヘロドトス『歴史』をはじめ、ポスト・アッシリア時代の重要な国家としてギリシア語の文献史料中にたびたび登場するのは対照的に、エラムにたいする言及はきわめて少ない。唯一例外ともいえるのが、クセノポンの『キュロスの教育』である。

本書には、スサ王アブラダタスとその王妃パンテイアが、物語における重要な脇役として登場する。スサとは後述するように、エラムの首都であったので、ここでのスサ王はエラム王とも読み替えられる。当初、ペルシア＝メディア連合軍とアッシリア＝リュディア連合軍との戦争のさなか、スサ王妃パンテイアが捕虜としてキュロス軍に連れてこられる。すると、それまでアッシリア軍に味方していたスサ王アブラダタスが、パンテイアを介して、ペルシア＝メディア軍へと寝返る。最終的にアブラダタスはアッシリアの同盟国であるリュディア軍との戦いに最前線で突入し、壮絶な戦死を遂げる。戦闘終了後、アブラダタスの遺体は回収され、妻の手によって葬られると、彼女もその墓の上でみずから命を絶つ。この「パンテイアとアブラダタスの物語」は古代ギリシア小説の起源とも見なされ、『キュロスの教育』のなかでもとりわけ注目を集めてきた（中務2016）。

しかしながら、『キュロスの教育』が一般的な意味での歴史書としてあつかわれることは、まずない。『キュロスの教育』は第一に、ペルシア帝国の創始者であるキュロスに仮託して、著者クセノボンが理想とする君主像を説く哲学書として理解される。そのため、本書では明らかに史実とは異なる記述が散見され<sup>8)</sup>、アブラダタスも実在のエラム王と見なす必要はない。その一方で筆者は、『キュロスの教育』には、ポスト・アッシリア時代の現実を反映しているかのような設定が見られることにも注目している。『キュロスの教育』に登場する「アッシリア」は首都をバビロンに置いているので、いわゆるアッシリア帝国ではなく、新バビロニア王国を指すと考えられる<sup>9)</sup>。この「アッシリア」には匿名の「善き王」とその子である「悪しき王」が対比的にあらわれ、スサ王アブラダタスが「アッシリア」を裏切るのも、この「悪しき王」への代替わりが一因にあった。これを史実に当てはめるならば、前者がネブカドネザル、後者がナボニドスに対応すると言えなくもない（ただし、実際のネブカ



ドネザルとナボニドスは親子関係にない)。そして何よりも、スサ（エラム）が新バビロニア王国とペルシア／メディアのあいだを揺れ動きながら、独自の王をいだく独立した政治体として描かれていることは、近年のエラム史研究の成果とも不思議と一致するのである。

とはいえ、メディア史の再評価がヘロドトス「メディア誌」のラディカルな読みなおしに始まったのとは異なり、エラム史の見なおしが『キュロスの教育』の新しい解釈に負っているわけではない。むしろこの地域における考古調査の積み上げによって、それまで隠れていたエラム史の実態が徐々に明らかとなってきたのである。そのうちとくに重要な出来事は、アンシャンの地が同定されたことであろう。エラムの王がしばしば「アンシャンとスサの王」と自称したように、都市アンシャンは西の首都スサと並ぶ、エラム国の東の首都だった。同地は長らく位置不定であったところ、1970年代におこなわれた一連の発掘調査により、スサの位置するフーゼスターンではなく、フェールス（古代パールサ、古代ギリシア語でペルシスといい、ペルシアの語源となる地域）西部に位置する、現タレ・マリヤーン (Tale Malyan) と同定された。このような研究の進展を受け、とりわけ2000年代に入ってからエラム史にかんする重要な研究書、学術論文、論文集が公刊されるようになった。

## (2) エラム史復元の困難

エラムの歴史もメディアのそれと同じく、アッシリアの記録に負うところが大きい。じつは、メディアとは異なり、エラムの場合はみづからの言語で書かれた文字史料も残っており、その文字も解読されている。エラム語は隣接するメソポタミアの諸言語と同様に楔形文字を用いて刻まれるが、アッカド語（アッシリア・バビロニア語）や、のちに楔形文字で表記されるようになる古代ペルシア語とも言語系統が異なる。しかしながら、エラム語で書かれた碑文は解読が不十分であること以上に、個別具体的な年代の特定が難しいため、事件史の復元には隣接するメソポタミアの、なかでもアッシリアの記録が重宝されるのだ。2000年に刊行されたウォーターズによる新エラム時代史 (Waters 2000) は、このようなエラム外からの文字史料を駆使して再構築されたものとなる (ウォーターズの手法にたいする批判としては、Henkelman 2003)。

新エラム時代においても、とくに詳細な歴史が再現されるのは、前750年頃から前650年頃の1世紀で、この間は各エラム王の名前や在位期間もかなり正確に復元される。最盛期の王シュトゥルク・ナフテ2世 (在位前717-699年) の時代には、エラムは大国アッシリアとも互角に渡りあった。しかし、前653年にウライ川畔でおきたティル・トゥーバの戦いで、エラムはアッシリアに決定的な敗北を喫した。この敗戦の様子は、ニネヴェに位置するアッシュルバニパルの宮殿壁面を飾るレリーフから読み取れる (渡辺 2006a; 渡辺 2006b)。この戦い以後もエラムは数度にわたるアッシリアの遠征を受け、王が短い治世ののちに次々に交代する不安定な時期を経験する (Dubovský 2013)。そしてついに前646年頃、エラムの首都スサがアッシリアによって劫掠される。勝者であるアッシュルバニパルが残した碑文に

よれば、このときスサの宝物庫は開けられ、神殿は略奪・破壊され、王墓は暴かれ、王の遺体も持ち出された(RINAP 5/1, 11, v. 126-vi. 76)。先に紹介したウォーターズの新エラム時代史も、スサ劫掠を年代記的な叙述の下限に設定する。

ウォーターズは、「スサ劫掠後、初期ペルシア時代までメソポタミアの史料はエラムにかんして限られた情報しか提供しない。後期エラムの史料の分析からは、ペルシアによって独立を失うまでの期間、エラムは分裂した状態で存続していたことが示される」(Waters 2000, 107)と述べ、この時期のエラムに末期衰退との評価を下している。文献史家であるウォーターズにしてみれば、文字史料を欠く以上、その歴史を描くことは困難なのであろう。しかしながら考古学者のポッツは、スサ劫掠以後のエラムについて、ウォーターズとは異なる歴史像を提示するのである。

ポッツはまず、スサ劫掠後にエラムはアッシリア領に組み込まれ、アッシリア滅亡後は新バビロニアのネブカドネザルによって征服されたという通説に疑念を呈する。ポッツによれば、この2つの事件はいずれも史実として確定するに足るじゅうぶんな証拠をもたない。アッシリアのエラム支配を示唆するテキストの読みは不確実であるし、バビロニアにエラム人が居住していたことを物語る史料は、新バビロニアによるエラム征服ではなく、両国の協力関係と解釈することも可能である。スサの「アクロポリス」出土の経済文書群からはむしろ、スサ劫掠後のエラムが復興の時代を迎えたことが想像される。また、フーゼスターン北東部に位置するクーレ・ファラフ(Kul-e-Farah)は、中-新エラム時代に聖域として利用され、磨崖には6枚のレリーフが残っているが、そのなかにはポスト・アッシリア時代に年代特定されているレリーフもあり、そこでは王(もしくは神)を先頭に進む壮大な祭礼行列の様子が描かれている。さらに、1982年にフーゼスターン東部に位置するベフバハン市近郊のアルジャーン(Arjan)で発見された新エラム時代の墓からは、バスタブ型をした青銅製の棺をはじめとする豪華な副葬品が出土している。これらからポッツは、ポスト・アッシリア時代において強力な権力者をもつ政治体としてのエラム国の継続性を強調するのである(Potts 2005; Potts 2016)。

### 3 初期ペルシア

#### (1) メディア「王国」からの「解放」

ポスト・アッシリア時代の出口は、アカイメネス朝ペルシア帝国の出現であった。それでは、この帝国はどこから生まれてきたのであろうか。

ヘロドトスは「メディア誌」において、「王位を継いだ〔第2代メディア王——筆者補〕プラオルテスは、メディアだけを統治するにあきたらず、ペルシアに出兵して攻撃を加え、メディアの属国としたが、メディアが攻撃を加えたのはこのペルシアが最初の国であり、また属国にした最初の国もこのペルシアであった」(Hdt. 1. 102)と述べる。その後、4代目メ

ディア王アステュアゲスの娘マンダネが、ペルシア人貴族のカンビュセスへと降嫁し、このふたりのあいだにキュロスが生まれた。すなわち、キュロスはペルシア人であるとともに、母方でメディアの血を引いていたわけだが、やがて成長したキュロスは祖父の国メディアと戦い、これを破る。そして、メディアとペルシアの支配・被支配関係をひっくり返すことにより、ペルシア帝国を打ち立てたのだという。

ギリシア語の文献史料では、このメディアからペルシアへの覇権移行およびペルシア帝国の母胎としてのメディア「王国」が、くり返し述べられる（阿部 2018）。クセノポン『キュロスの教育』では、ヘロドトスの『歴史』と同様にキュロスはメディア王アステュアゲスの孫にあたり、キュロスとアステュアゲスの孫娘（キュロスにとっての従姉妹）との結婚によって、メディアからペルシアへと覇権が平和裡に移行する。ヘロドトス『歴史』から半世紀ほど遅れて執筆されたクテシアス『ペルシア史』では、アステュアゲスとキュロスのあいだに直系の血縁関係は認められないが、キュロスがメディアの被支配民であったペルシア人を率い、宗主国のメディアを戦闘でうち負かすことによって、ペルシア帝国が誕生したという。このキュロス－アステュアゲス間の戦争はバビロニア出土の「ナボニドス年代記」でも前 550 年の出来事として語られており（ABC 7. ii. 1-4）、ペルシアがメディアの打倒をきっかけに、ポスト・アッシリア時代の勢力争いに名乗り出たことは間違いなからう。

しかしながら、上で見たような近年におけるポスト・アッシリア時代の見なおしでは、このようなメディアからペルシアへの直接的な継承に懐疑的な意見が多い。ロリンガー（先にメディア「王国」否定論者として紹介した研究者）とキーナストは偶然にも同じ 1999 年に発表した論文（Rollinger 1999; Kienast 1999）で、メディアがペルシアを支配下に収めていたというギリシア語文献史料の情報にたいする疑念を提示した。このようなメディアの領域をミニマムに見積る研究にたいしては、タップリン（Tuplin 2005）が反論している。タップリンは、「メディア支配の時代には、諸民族が互いに支配し合ってもいた。メディア人が全体の支配者ではあるが、直接には彼らの最も近くに住む民族だけを支配するのであって、この民族がその隣の民族を、そしてまたこの民族がその隣接民族を支配するといったやり方であった」というヘロドトスの記述（Hdt. 1. 134）に着目し、メディアは広大な領域をゆるやかに支配していたのだと主張した。タップリンによれば、メディアの支配はアッシリアやアカイメネス朝ペルシアのような「帝国」のそれではなく、「覇権」や「勢力」と呼ぶべき性格であったという。タップリンはメディアとペルシアの支配・被支配関係を直接論じているわけではないが、この説に従えば、ペルシアがメディアの属国の地位から完全に「解放」されたと見なすことも難しかろう。

## (2) エラム母胎説

前述のとおり、メディアをペルシア帝国の直接的な母胎とする見解は、近年の学界で急速に支持を失っている。そしてメディアに入れ替わるようにして、ペルシア帝国の先駆者とし

での地位を上昇させているがエラムである (Liverani 2003; Álvarez-Mon 2021)。とはいえ、メディアがアカイメネス朝ペルシアにとって最初期の征服地であったことに変わりはなく、したがって初期ペルシアの国家形成においてメディアが果たした役割を過小評価してはならない点は、あわせて強調しておきたい (Waters 2010)。

ペルシア帝国におけるエラムの重要性は、まずその言語に認めることができる。前6世紀末のダレイオス1世時代以降、ペルシア帝国では古代ペルシア語、アッカド語、エラム語の3言語併記を基本とした公的な碑文が作成されるようになる。これら3言語は互いに言語系統が異なったが (ペルシア語は印欧語、アッカド語はセム系言語、エラム語は系統不明)、いずれも楔形文字で刻まれた。古代ペルシア文字は、研究者のあいだで議論があるものの、ダレイオスのイニシアティブによって発明されたと推測されている (Waters 1996)。また、アッカド語は北部のアッシリア方言と南部のバビロニア方言にわけられるが、このうちペルシア帝国の碑文で用いられたのはバビロニア方言である。ペルシア帝国が公的碑文にアッカド語を用いたのも、先行するメソポタミアの大国を内に取り込んだという事実から考えれば、ごく自然な成り行きであろう。問題はわざわざエラム語が選択された理由であり、これはダレイオス時代のペルシア帝国にとってエラムが無視しえない重要性をもっていたとも理解できる<sup>10)</sup>。さらに、これらの碑文ではペルシア王の統治した地域の一覧が付される場合があるが、そこではペルシアをのぞけば、エラムがかならず最初、もしくは2番手に登場する (Lincoln 2007, 23-24)。この事実も、ペルシア帝国においてエラムのもつ特別な地位を示唆していよう。

エラム語の使用はペルシア王による公的な碑文に限られない。ダレイオス治下に着工された新首都ペルセポリスからは、全体像が把握できないほど大量の粘土板文書が出土しているが、エラム語はこれら粘土板テキストの実に9割で使用されている (残り1割のうち、最多をしめるのはアラム語で、公的碑文とは異なりペルシア語、アッカド語の使用例はごく僅少)。これらペルセポリス出土の文書群は、物品の配給について書かれていることが多いため、かつてはおもに社会経済史の史料として用いられた (たとえば、川瀬 1987)。しかし近年、これらを文化史的な視点から読みなおす作業が進められている。たとえば、ヘンケルマンの浩瀚な研究書 (Henkelman 2008) は、粘土板文書の読解から、ペルセポリスで信仰されていた神々がじつに多種多様であったこと、そしてそれらのうちでもエラムの神 (その主神フンバン) への言及がとりわけ多かったことを指摘し、ペルシア帝国内におけるエラムからの宗教的な影響を明らかにした。

また、粘土板のなかにはテキストだけではなく、図像が押捺されたものもある (テキストをとまわらない、図像だけの粘土板もある)。アカイメネス朝の美術史を専門とするガリソンは、この粘土板や王作成の公的な碑文を飾るレリーフに登場する有翼円盤図像の解釈で、エラムからペルシアへの影響に着目する (Garrison 2009)。従来この有翼円盤図像は古代ペルシアの主神であるアフラマズダなのか否かという問題を中心に議論されてきた。しかしガ

リソンはヘンケルマンの研究成果を援用して、これがエラムの宗教概念である「キティン」——神から地上の支配者たる王に与えられた「庇護」——を表象している可能性を提示したのである。

このようにペルシア帝国ではエラムのしめる比重が大きかった。とはいえ、先述のとおり、スサ劫掠（前 640 年代）以降のエラム史には不透明な部分が多く、そこからキュロスの登場（前 550 年）、もしくはエラムの重要性が確実視できるダレイオスの登場（前 522 年）までを、どのような線でつなぐべきか、依然として解明されていない。また、キュロス・カンビュセス親子（テイスベスを祖とする家系）とダレイオスの家系（アカイメネスを祖とする家系）が直系の親族関係にないことは明らかで、初期ペルシア史におけるエラムの位置づけには、このテイスベス家とアカイメネス家がどう結びつくのかという問題も絡んできて、事態がいつそう複雑となっている。

この「ブラック・ボックス」とも呼べる 1 世紀のヒントとなる史料が、わずかながら見つかっている。その最大のもは、「アンシャンの王」という文言である<sup>11)</sup>。キュロスは自身が作成した数点の碑文で、みづからを「アンシャンの王」と呼び、また新バビロニア最後の王となるナボニドスの碑文でも、キュロスには同じ称号が付されているのである。アンシャンというのはエラム東方のファールス地方に所在する都市で、西のスサとならんでエラムの首都としても機能していた。ただし、新エラム時代においては、文字史料での言及が激減することから、アンシャンの地位はそれ以前の時代から相対的に低下したと考えられている。それでは研究者たちはこの 1 世紀間を、限られた点をつなぎ合わせることによって、どう描くのであろうか。ここでは、前 7 世紀後半以降のエラム史について異なる見解を提示したウォーターズとポッツの所説を比較しながら紹介しよう。

まずはウォーターズの説である。前 1 千年頃、東の首都アンシャンの地位は下がっており、それと同時にエラムには東からペルシア人が流入してきた（cf. Miroschedji 1985）。前 640 年代のスサ劫掠によってエラムが分裂・衰退していったところ、東方ではペルシア人が勢力をもつようになり、ファールス（ベルシス）地方の都市アンシャンにはペルシア人を中心とした小王朝が確立した。これがのちにキュロスを世に出す勢力となる。やがてこのアンシャンの王朝はキュロスのもと、隣国のメディアを打倒し、ペルシア帝国へと成長していった。キュロスの家系（テイスベス家）と後から来るダレイオスの家系（アカイメネス家）とは直接的な血のつながりはなかったが、アンシャンのテイスベス朝が拡大するに際しては、ファールスの有力貴族であるアカイメネス家の力を借りる必要があった。キュロスはこのアカイメネス家からカッサンダネを妻としてもらいうけ（Hdt. 3. 2）、勢力基盤を整えた。そして、カンビュセスの死去によってテイスベス家の血筋が断絶すると、外戚であるアカイメネス家のダレイオスがその座を継いだのだと推測される（Waters 2004）。

続いて、ポッツの説を紹介する。まずポッツによれば、大前提として、アンシャンは前 1 千年以降もエラムにおける有力な都市であり続けたであろうという。そもそもアンシャン

(タレ・マリヤーン)の発掘は限定的で、現段階ではアンシャンの没落を判断することはできない。前述のとおりポッツによれば、エラムはアッシリアによるスサ劫掠によって一時的な被害をこうむるものの、その後復興し、ポスト・アッシリア時代においても独立した政治体であり続けた。たしかに前1千年頃からペルシア人がエラム領の東部に流入していたが、キュロス自身はこのようなペルシア系の出自ではなく、スサ劫掠以後も力を保持していたアンシャンのエラム国家を基盤として、メディアを打倒した。したがって、キュロスの帝国はそもそも「ペルシア」帝国ではなくテイスペス朝のエラム系国家であり、彼の血筋が途絶えたとき、アカイメネス家のペルシア人であるダレイオスがこの国を乗っ取ったのだという(Potts 2005)。

このように2つの説をならべると、まったく異なる歴史像が描かれていることに驚くであろう。前1千年以後のアンシャンの地位、スサ劫掠以後のエラムの国力、キュロスによる帝国創建に果たした流入ペルシア人の役割、キュロスの家系と後からくるダレイオスの家系との関係性などが、主たる相違点となる。このように、現段階ではペルシア帝国の誕生について(それが果たして「ペルシア」帝国と呼べるのか否かもふくめ)いくつもの可能なパターンが提示でき、しかしながらいずれもが決定打を欠くのである。ウォーターズとポッツの見解の相違も、文字史料が示唆する断絶を重視するか否かに起因していよう。けっきょくは、さらなる証拠(おそらくは考古学的な新発見になろう)の出現を待つしかない。

## おわりに

以上の議論から明らかなように、ポスト・アッシリア時代を「四王国分立時代」と表現するのは無理がある。それは、新バビロニア、リュディア、エジプト、メディアにエラムをくわえた「五王国分立時代」だったかもしれないし、あるいはメディアとエラムには「王国」としての体裁に欠けるところがあるとして失格にするならば、「三王国分立時代」とも呼べるかもしれない。本稿の考察対象とはしなかったが、近年キュロスが滅ぼした国家として、ウラルトゥもその1つだった可能性が指摘されている。ウラルトゥは前1千年紀前半にアナトリア東部からメソポタミア北部に栄えた王国で、一時は最盛期のアッシリア帝国にとって最大の脅威ともなっていた。従来、ウラルトゥはアッシリアの滅亡のあとを追うように壊滅したと考えられていた。ところが、今世紀に入ってから、これまでキュロスが「リュディア」に攻め込んだとする「ナボドス年代記」の欠損部分(ABC 3. ii. 16)の補いを、「ウラルトゥ」と読む新解釈が提案され、ウラルトゥがポスト・アッシリア時代を生き延びた可能性が浮上したのである(Rollinger 2008)。そうなればいよいよ、ポスト・アッシリア時代の多極性を形容するのに、4という数字にこだわる必要はなくなる。

このようなポスト・アッシリア史研究の進展にともない、初期ペルシア史も徐々に明らかとなってきた。全体的な傾向としては、ペルシアの国家形成におけるメディアとエラムのし

める比重が逆転したといえる。しかしながら、この両国がそれぞれ具体的にどのような役割を担ったかについては、決定的な部分での証拠不足から、いまだ多くの謎が残る。

それでは、従来のような「四王国分立時代」のイメージがどこから生じてきたかといえは、メディアの比重を必要以上に大きく見せた、ヘロドトス『歴史』をはじめとしたギリシア語文献史料の責任は無視できない。そして、いまこの時代のイメージが修正されつつあることは、別の新たな疑問を生じさせる。すなわち、なぜギリシア語作家たちはポスト・アッシリア時代におけるメディアの役割を肥大化させ、その一方でエラムの存在を無視したのであろうか。筆者はこの問題は、ポスト・アッシリア時代の大国である新バビロニア王国およびその王ネブカドネザル2世のあつかいと表裏一体をなすと考えている。

ネブカドネザルは、アッシリア帝国からの独立を果たした父ナボポラサルの後を継ぎ、新バビロニア王国2代目の王となった。彼は、ユーフラテス河畔のカルケミシュでおこなわれた戦いでサイス朝エジプトを破り、シリア・パレスティナを領有するなど、アッシリア帝国の遺領の多くを引き継いだ。それだけではなく、アッシリア王センナケリブによって破壊された都バビロンを再建し、メソポタミア第一の首都へと押し上げた（山田2017）。ヘロドトスやクテシアスといったギリシア語ペルシア史家は、都市バビロンについてかなりの関心を寄せる一方で、新バビロニアの歴史についてはほとんど正確な知識をもち合わせていない（Heller 2015）。ヘロドトスの『歴史』によれば、ニネヴェ陥落後、バビロンにはニトクリスという名の女王とその息子ラビュネトスの二人の王が立ったという（Hdt. 1. 185-188）。これを無理やり史実に当てはめるならば、前者がネブカドネザル2世、後者がナボニドスということになるが、むしろネブカドネザルは女王ではないし、ナボニドスもネブカドネザルの実子ではない。さらにクテシアス『ペルシア史』の「アッシリア史」「メディア史」の諸巻ではネブカドネザルはおろか、新バビロニア王国の存在自体までが抹消されているのである<sup>12)</sup>。本稿の主たる対象であったポスト・アッシリア時代の実態研究は、ギリシア語史家の現実と認識のずれ幅を明確にし、またそこから、彼らがアッシリアからペルシアへと至るオリエントの歴史をどう捉えていたのかという、新たな研究課題へとつながっていくであろう。

## 註

- 1) アッシリアからペルシアへの継承を示す、もっとも直接かつ明瞭な事例は、キュロス自身の作成した碑文（「キュロスの円筒形碑文」）における「余の先に立つ王」としてのアッシュルバニパルへの言及である（Kuhrt, *The Persian Empire*, 3. 21, line 43）。
- 2) 本稿の議論の直接的な対象ではないが、エジプト第26王朝を「老衰王国」とする見方にたいする修正として、藤井2006; 藤井2018がある。
- 3) たとえば『詳説世界史B』（山川出版社、2015、23頁）では、「[アッシリア崩壊後]オリエント世界にはエジプト、小アジアのリディア、新バビロニア（カルデア）、イラン高原のメディアの4王国が分立することになった」。『改訂版世界史用語集』（山川出版社、2018年、11頁）によると、「四王国分立」は「世界史B」の教科書7冊すべてに記載される、最重要用語となっている。
- 4) 本文後述のように、4人のメディア王の在位年数を足すとちょうど150年になる。ペルシアによっ

- てメディアが滅亡したのは前 550 年のため、メディアの建国は前 700 年の出来事だと計算できる。
- 5) ヘルム論文にたいする反論ではないが、同じ著者によるメディアの国家形成のプロセスをたどった論文として、Brown 1986 がある。
  - 6) ただし、サンシシ=ヴェールデンブルフによる本論考は、1981 年にオランダ語でなされた口頭発表を英語に改稿したものだという。したがって、同じ年に発表されたヘルム論文からサンシシ=ヴェールデンブルフ論文への直接的な影響関係は、少なくとも着想の段階では、認められなかったかもしれない。
  - 7) しかし、学界においてメディア「王国」が完全に否定されたわけではない。CE 論集に寄稿した研究者でも、ローフ (Roaf 2003) やストロナック (Stronach 2003) らの考古学者は、伝統的なメディア「王国」像がいまだ有効性を保持すると見なす。すなわち、考古資料の不足によりメディア「王国」の存在自体を疑問視する傾向は、考古学者よりも、むしろ文献学者に強い。
  - 8) たとえば『キュロスの教育』(8. 6. 20) では、ペルシア帝国によるエジプト侵攻・征服が、子のカンビュセスの功績から、キュロス治下の出来事へと改変されている。
  - 9) ヘロドトス『歴史』(1. 178) でも、新バビロニア王国はアッシリアと呼ばれている。この時代のギリシア語史家はアッシリア帝国と新バビロニア王国をとくに区別せず、一続きにとらえていた。Cf. Asheri *et al.* 2007, 149.
  - 10) メディアが無文字社会であった可能性もある (メディア語の文字史料は現存していない) ため、言語の点でペルシア帝国におけるエラム (語) とメディア (語) の重要性を比較検討することはできない。従来、ペルシア語碑文にあらわれる「非ペルシア語的」用法を集めることによって、メディア語を復元しようという試みもなされてきたが、このような手法には空理空論との批判も強い。Cf. Briant 2003, 24-25.
  - 11) そのほか、アッシュルバニパルに帰順した「Parsumaš (ペルシア?) の王 Kuraš (キュロス 1 世 = キュロスの 2 世の祖父?)」という文言や、ペルセポリスから出土した「Šešpeš (テイスペス) の子アンシャン人の Kuraš (キュロス 1 世?)」という銘をもつ印章図像も、この時代をつなぐ点となる (Kuhrt, *The Persian Empire*, 3. 2-3)。ただし、Parsumaš, Šešpeš, Kuraš の地名・人名の同定や、印章の制作年代、所有者の特定など、研究者間で意見の隔たりが大きい。詳しくは、Waters 2011.
  - 12) ネブカドネザルにかんして、ある程度まとまった有用な記述がギリシア語の歴史叙述に見られるようになるのは、ペロソス著『バビロニア史』を待たなければならない。ペロソスはヘレニズム時代初頭にバビロンの神官職にあった人物で、バビロニア出身ながら、ギリシア語で自国の歴史を著した。彼の歴史書は、アッシリアによる支配ののち、ナボポラサルからナボドネドスまでの新バビロニア王国史、その後アカイメネス朝ペルシア史がつづられており、それ以前のギリシア語史家が描いたポスト・アッシリア史とは明らかに異なる構成となっている。Cf. Verbrugge and Wickersham 2001.

#### [参照史料と略号]

- ABC: Grayson, A.K. 2000, *Assyrian and Babylonian Chronicles*, Winona Lake.  
 Hdt: ヘロドトス (松平千秋訳) 1971-1972 『歴史』(全 3 冊) 岩波書店。  
 Kuhrt, A. 2007, *The Persian Empire: A Corpus of Sources from the Achaemenid Period*, London.  
 RINAP 5/1: Novotny, J and J. Jeffers 2018, *The Royal Inscriptions of Ashurbanipal (668–631 BC), Aššur-etel-ilāni (630–627 BC), and Sin-šarra-iškun (626–612 BC), Kings of Assyria, Part 1* (The Royal Inscriptions of the Neo-Assyrian Period, Volume 5/1), University Park (PA).

#### [参考文献]

- Álvarez-Mon, J. 2021, 'Elamite Traditions', in B. Jacobs and R. Rollinger eds., *A Companion to the Achaemenid Persian Empire*, Vol. 1, London, 389-402.  
 Asheri, D. *et al.* 2007, *A Commentary on Herodotus Books I-IV*, Oxford.



- Briant, P. 2002, *From Cyrus to Alexander: A History of the Persian Empire*, Winona Lake.
- Brown, S.C. 1986, 'Media and Secondary State Formation in the Neo-Assyrian Zagros: An Anthropological Approach to an Assyriological Problem', *Journal of Cuneiform Studies* 38, 107-119.
- Brown, S.C. 1988, 'The Médikos Logos of Herodotus and the Evolution of the Median State', in A. Kuhrt and H. Sancisi-Weerdenburg eds., *Achaemenid History III. Method and Theory*, Leiden, 71-86.
- Dubovský, P. 2013, 'Dynamics of the Fall: Ashurbanipal's Conquest of Elam', in K. de Graef and J. Tavernier eds., *Susa and Elam: Archaeological, Philological, Historical and Geographical Perspectives*, Leiden, 451-470.
- Garrison, M.B. 2009, 'Visual Representation of the Divine and the Numinous in Early Achaemenid Iran: Old Problems, New Directions', in C. Uehlinger and F. Graf eds., *Iconography of Deities and Demons in the Ancient Near East (IDD)*, Leiden. (Electronic Pre-Publication: <http://www.religionswissenschaft.unizh.ch/idd>)
- Heller, A. 2015, 'Why the Greeks Know so Little about Assyrian and Babylonian History', in R. Rollinger and E. van Dongen eds., *Mesopotamia in the Ancient World*, Münster, 331-348.
- Helm, P.R. 1981, 'Herodotus' "Médikos Logos" and Median History', *Iran: Journal of the British Institute of Persian Studies* 19, 85-90.
- Henkelman, W.F.M. 2003, 'Defining "Neo-Elamite History"', *Bibliotheca Orientalis* 60, 251-263.
- Henkelman, W.F.M. 2008, *The Other Gods Who Are: Studies in Elamite-Iranian Acculturation Based on the Persepolis Fortification Texts*, Leiden.
- Johandi, A. 2012, 'Mesopotamian Influences on the Old Persian Royal Ideology and Religion: The Example of Achaemenid Royal Inscriptions', in *Cultural, Peace and Conflict Studies Series. 4: War of Words, Words of War: Texts and Interpretations (ENDC Proceedings 16)*, Tartu, 159-179.
- Kienast, B. 1999, 'The So-Called "Median Empire"', *Bulletin of the Canadian Society for Mesopotamian Studies* 34, 59-67.
- Lanfranchi, G. 2003, 'The Assyrian Expansion in the Zagros and the Local Ruling Elites', in Lanfranchi – Roaf – Rollinger eds., 79-118.
- Lanfranchi, G., M. Roaf, and R. Rollinger eds. 2003, *Continuity of Empires (?): Assyria, Media, Persia*, Padua.
- Lincoln, B. 2007, *Religion, Empire, and Torture: The Case of Achaemenian Persia, with a Postscript on Abu Ghraib*, Chicago.
- Liverani, M. 2003, 'The Rise and Fall of Media', in Lanfranchi – Roaf – Rollinger eds., 1-12.
- Miroschedji, P. de 1985, 'La fin du royaume d'Anšan et de Suse et la naissance de l'Empire perse', *Zeitschrift für Assyriologie und Vorderasiatische Archäologie* 75, 265-306.
- Panaino, A. 2000, 'The Mesopotamian Heritage of Achaemenian Kingship', in S. Aro and R.M. Whiting eds., *The Heirs of Assyria. Proceedings of the Opening Symposium of the Assyrian and Babylonian Intellectual Heritage Project. Held in Tvärminne, Finland, October 8-11, 1998*, Helsinki, 35-49.
- Potts, D.T. 2005, 'Cyrus the Great and the Kingdom of Anshan', in V.S. Curtis and S. Stewart eds., *Birth of the Persian Empire*, London, 7-28.
- Potts, D.T. 2016, *The Archaeology of Elam: Formation and Transformation of an Ancient Iranian State* (Second Edition), Cambridge.
- Radner, K. 2003, 'An Assyrian View on the Medes', in Lanfranchi – Roaf – Rollinger eds., 37-64.
- Radner, K. 2013, 'Assyria and the Medes', in D.T. Potts ed., *The Oxford Handbook of Ancient Iran*, Oxford, 442-456.
- Roaf, M. 2003, 'The Median Dark Age', in Lanfranchi – Roaf – Rollinger eds., 13-22.
- Rollinger, R. 1999, 'Zur Lokalisation von Parsu (m) a (š) in der Färs und zu einigen Fragen der frühen persischen Geschichte', *Zeitschrift für Assyriologie und Vorderasiatische Archäologie* 89, 115-139.
- Rollinger, R. 2003, 'The Western Expansion of the Median "Empire": A Re-examination', in Lanfranchi – Roaf – Rollinger eds., 289-319.

- Rollinger, R. 2008, 'The Median "Empire", the End of Urartu and Cyrus the Great's Campaign in 547 BC (Nabonidus Chronicle II 16)', *Ancient West and East* 7, 51-65.
- Rollinger, R. 2020, 'The Medes of the 7th and 6th c. BCE: A Short-Term Empire or Rather a Short-Term Confederacy?', in R. Rollinger, J. Degen, and M. Gehler eds., *Short-Term Empires in World History*, Wiesbaden, 189-213.
- Sancisi-Weerdenburg, H. 1988, 'Was There Ever a Median Empire?', in A. Kuhrt and H. Sancisi-Weerdenburg eds., *Achaemenid History III. Method and Theory*, Leiden, 197-212.
- Sancisi-Weerdenburg, H. 1994, 'The Orality of Herodotus' *Medikos Logos* or: The Median Empire Revisited', in H. Sancisi-Weerdenburg, A. Kuhrt and M.C. Root eds., *Achaemenid History VIII. Continuity and Change*, Leiden, 39-55.
- Stronach, D. 2003, 'Independent Media: Archaeological Notes from the Homeland', in Lanfranchi – Roaf – Rollinger eds., 234-248.
- Tuplin, C. 2005, 'Medes in Media, Mesopotamia, and Anatolia: Empire, Hegemony, Domination or Illusion?', *Ancient West and East* 3, 223-251.
- Verbrugge G.P., and J.M. Wickersham 2001, *Berosos and Manetho, Introduced and Translated: Native Traditions in Ancient Mesopotamia and Egypt*, Ann Arbor.
- Waters, M. 1996, 'Darius and the Achaemenid Line', *Ancient History Bulletin* 10, 11-18.
- Waters, M. 2000, *A Survey of Neo-Elamite History*, Helsinki.
- Waters, M. 2004, 'Cyrus and the Achaemenids', *Iran: Journal of the British Institute of Persian Studies* 42, 91-102.
- Waters, M. 2005, 'Media and Its Discontents', *Journal of the American Oriental Society* 125, 517-533.
- Waters, M. 2010, 'Cyrus and the Medes', in J. Curtis and S. Simpson eds., *The World of Achaemenid Persia: History, Art and Society in Iran and the Ancient Near East*, London, 63-71.
- Waters, M. 2011, 'Parsumaš, Anšan, and Cyrus', in J. Álvarez-Mon and M.B. Garrison eds., *Elam and Persia*, Winona Lake, 285-296.
- 阿部拓見 2018 「クテシアスとヘロドトス——ギリシア史学史におけるペルシア史叙述の伝統」『洛北史学』20、95-120。
- 川瀬豊子 1987 「ペルセポリス王室経済圏における馬群管理」『オリエント』30-1、21-40。
- 杉勇 1969 「四国対立時代」『岩波講座 世界歴史』第1巻（「古代オリエント世界・地中海世界1」）岩波書店、273-292。
- 中務哲郎 2016 「『キュロスの教育』と古代小説の起源」、同『極楽のあまり風——ギリシア文学からの眺め〔増補版〕』ピナケス出版、167-173。
- 藤井信之 2006 「エジプトは「折れた葦か」？——前1千年紀のエジプト史再考に向けて」、飯田収治編『西洋世界の歴史像を求めて』関西学院大学出版会、35-53。
- 藤井信之 2018 「サイス王朝（第26王朝）時代のエジプト——対外政策を中心に」『エジプト学研究セミナー 2017』関西大学国際文化財・文化研究センター、81-106頁。
- 山田重郎 2017 『ネブカドネザル2世——バビロンの再建者』山川出版社。
- 渡辺千香子 2006a 「浮彫り《ティル・トゥーバの戦い》の構図に関する考察」『大阪学院大学 人文自然論叢』52、37-56。
- 渡辺千香子 2006b 「新アッシリア時代の浮彫り《ティル・トゥーバの戦い》におけるエジプト美術影響説の検討」『西南アジア研究』65、1-20。